

## 応答の副詞—Ja と Nein—の論理

日本語における「はい」、「いいえ」と対照して

山内 貞 男

われわれが英語、ドイツ語、フランス語あるいはその他のヨーロッパ諸国語に接して、日本語との相違を否応無しに感じさせられ、また思い知らされる点といえば、一般的に音声組織とか文法構造、あるいは更に言語と緊密な関連のある発想法—ものの見方・考え方とか表現法などが挙げられる。この小論において取り扱う「否定の問に対する応答の仕方の相違」もその一つであることは、周知の事実である。この相違については種々の解釈があるといわれるが、小論においては、これを否定の問のみに限定せず、肯定の問・否定の問に対する応答の仕方の相違として一般的に取り上げ、問と応答との間を貫ぬいて働く単純明快な肯定・否定の論理によって解釈しようとする。その際、日本語に対するヨーロッパの言語としては、筆者の専攻上、ドイツ語を選ぶ<sup>1)</sup>。ただし、ドイツ語以外のヨーロッパ諸国語の例をドイツ語に適用することは出来ても、逆にドイツ語の場合をそのままこの他の諸国語に適用することが出来ない点において、ドイツ語をその代表格扱いするのは当を得ていないと思われるけれども、ドイツ語の場合を問題とすることにより、この小論の解釈が鮮明になる、否むしろ肯定・否定を骨子とする応答の論理が鮮明に表われるという利点があることを、あらかじめ断っておく。なお、日本語における応答の「はい」と「いいえ」は感動詞に入れられ、ドイツ語のそれ—Ja と Nein は副詞に分類さ

れている。ここでは、前者を応答の感動詞、後者を応答の副詞と呼び、両者を合わせて一般的に応答〔詞〕と名づけ<sup>2)</sup>、この応答〔詞〕とそれに続く応答文の全体を答ということにする<sup>3)</sup>。

**Kennen Sie den jungen Herrn nicht ?**

**Ja, ich kenne ihn.**

または **Nein, ich kenne ihn nicht.**

あの若い男の方をご存じありませんか。

いいえ, 存じております。

または はい, 存じません。

この例文におけるような、否定の問に対する応答の仕方の相違については、一般に、**Ja** と **Nein** は問の内容・事柄に対して用いられ、はいといいえは問の形式・言葉遣いに対して使われるという解釈が行なわれている<sup>4)</sup>。またこの相違を、**Ja** と **Nein** が副詞であるに対してははいといいえが感動詞であるという、品詞の別から見た文法的機能の相違として把握する解釈や<sup>5)</sup>、あるいは全体的な観点から、これは合理的な「論理の文法」と感情的な「心理の文法」との相違に帰すると取る解釈もある<sup>6)</sup>。

ところでわれわれは、このような幾つかの解釈に対してその当否を論じ、異議を唱えるのではなく、かような解釈の成り立つ論理的基盤を明らかにするという意味での異説を立てようとする。つまりこの小論は、最初に少し触れたように、肯定あるいは否定の問—決定疑問—と肯定あるいは否定の応答との間を貫ぬいて働く肯定・否定の論理から、問題の「応答の仕方の相違」を解釈し、それに依って、他の幾つかの解釈が論理的にも成り立つことを明らかにしようとする試みである。

さて問題の出発点でもあり一つの中心でもあるのは、否定の問に対する応答の仕方の相違であるから、先ず前掲の例文によってその論理的解明を行ない、

次いで類似の他の現象に言及し、それから肯定の問に対する応答〔の仕方の相違〕を上の場合と同一の論理から解釈して、最後に総括的な結論を述べよう。

**Kennen Sie den jungen Herrn nicht ?**

あの若い男の方をご存じありませんか。

という否定の問に対する肯定の答は、

**Ja, ich kenne ihn.**

いいえ, 存じております。

であり、これを問に対する答の、あるいは問から答への論理—肯定・否定の論理の働きという点から再構成してみれば、ドイツ語の場合は、問における否定の否定すなわち肯定として、応答は Ja (応答文も肯定) となり、また日本語の場合は、問における否定を否定して、応答はいいえ (応答文は肯定) となる。上の否定の問に対する否定の答

**Nein, ich kenne ihn nicht.**

はい, 存じません。

も同一の方法で再構成すれば、ドイツ語の場合は、問における否定の肯定すなわち否定として、応答は Nein (応答文も否定)、また日本語の場合は、問における否定を肯定して、応答ははい (応答文は否定) となる<sup>7)</sup>。答が肯定であれ否定であれ、ドイツ語における応答は、否定の問との間に「の否定またはの肯定すなわち」として表現される一種の媒介過程を持つに対して、日本語における応答は、助詞「を」によって否定の問に直接している。ところで、ドイツ語の場合における問と応答との間の媒介過程は、決して問と応答との間に独立して在り得るものではなく、それ自体は既に応答に先行して問を受けとめる、答の普通は潜在的な一機能であると解せられる。日本語の場合にはこのような媒介がないということは、日本語の応答がそれ自身問を受けとめる媒介の役割を果たしている〔と見ることが出来る〕ということであろう。日本語の場合はドイツ語と比較して、答の全体が問の方へ強くずり寄っている。これを念の為、

ドイツ語				
		答		
問	媒介	応答	応答文	
否定	否定	肯定	肯定	
	肯定	否定	否定	
問	応答	応答文		
		答		
日本語				

表にしてみよう。すなわち日本語の応答は肯定（はい）、否定（いいえ）ともドイツ語における答の媒介に当り、また日本語の応答文は肯定、否定ともにドイツ語における応答に相応するのである。序に、ドイツ語において否定の問に対する肯定の応答として、**Ja** に代り **Doch** が好んで用いられる理由を挙げれば、それは否定の問に対する肯定の応答が、先の表から明らかなように、否定に媒介され、問における否定の否定すなわち肯定という二重否定の強い性格を持ち、従ってこの場合は概して **Ja** よりも力の強い **Doch** の方が適當であるからである。

このような応答の **Ja** に類似しているのは、文中において先行する発言内容を制限ないしは否定しつつ、後続の発言内容を肯定的に強調する場合の **Ja** である。これは日本語では「いな（いや、いいえ）」と否定的表現をとる。

das Gelächter einer ganzen Stadt, ja eines Landes

町中の、いな一国の人々の哄笑

**Ja** は、先行する発言内容の制限あるいは否定よりも、むしろ後続の発言内容の肯定的強調であるが、それに反していなの方は、先行の発言内容の制限ないし否定による、後続発言内容の肯定的指示であって、先の否定の問に対するドイツ語の答—否定の媒介と肯定の応答—と、日本語の答—否定の応答と肯定の応答文—とのずれ、ないし相違に対応するものである。

ところで、先に述べた応答の仕方の相違は、否定の問に対する場合にのみ起る特殊な現象であろうか。「ドイツ語では、問が肯定であれ否定であれ、答が肯定ならば **Ja** を使い、否定ならば **Nein** で答える。」というようなことがよくいわれるが、この言葉は問題の現象が特殊なものではなく、一般的であることを暗示、いなそれどころか明示するものではなからうか。応答の副詞が問の肯否に直接関係がなく、むしろ応答文と直接しているということは、それが問に対して、答の媒介過程に次ぐ独立した機能を持つことを示すものと考えられる。とすれば、肯定の問に対する応答においても、ドイツ語と日本語の論理的・機能的な相違があるのであって、その一致は実質的なものではなく、単に外見上のものに過ぎない筈である。この推測の正しいことを、例文の論理的把握によって示そう。

**Kennen Sie den jungen Herrn?**

**Ja, ich kenne ihn.**

または **Nein, ich kenne ihn nicht.**

あの若い男の方をご存じですか。

はい、存じております。

または いいえ、存じません。

これを、問に対する答の、あるいは問から答への肯定・否定の論理の働きとして捉え直せば、肯定の答においては、ドイツ語の場合、問における肯定の肯定すなわち肯定として、応答は **Ja** (応答文も肯定)、日本語の場合は問における肯定を肯定して、応答ははい (応答文も肯定) となり、また否定の答においては、ドイツ語の場合、問における肯定の否定すなわち否定として、応答は **Nein** (応答文も否定) となるのに対し、日本語の場合は問における肯定を否定して、応答はいいえ (応答文も否定) となる。ここにおいても、答が肯定であれ否定であれ、ドイツ語の応答には、肯定の問との間に「**の肯定またはの否定すなわち**」として表現される一種の媒介過程があるけれども、日本語の応答にはこのような媒介過程が先行せず、応答が問に直接している。この媒介過程

は、既に述べたように、応答に先行して問を受けとめる、答の原則として潜在的な一機能であるが、ドイツ語においては、これによって問を受けとめた上で問に対して答を返さず始めの段階が応答であり、それが応答の副詞として機能するに対し、日本語においては、応答自体が問に直接して問を受けとめる媒介過程の役割を勤め、従ってそれはドイツ語の場合におけるような、問に対して答を返さず始めの段階ではなく、それ以前の段階であり、応答の感動詞として機能し、実際に問に対して答を返さず役は、それに続く応答文が引き受ける。ドイツ語の場合、答の応答と応答文は問に対する返答という同一の基盤を持ち、両者の間に形式的にみて論理的な隙間ないし飛躍といったものは存在しないが、日本語の場合には、答の応答と応答文は同じ答ではあっても、媒介過程を兼ねている返答以前の段階と返答の段階という基盤の不同を示し、応答と応答文との間には従って論理的な隙間ないし飛躍が介在するといえよう。これは、既に述べた否定の問に対する応答の仕方の相違についてもいえることである。

肯定の問に対する応答の仕方の相違に関しても、先の否定の問に対する場合同様、日本語の答はドイツ語のそれに比べて全体に問の方へずり寄っている。これもまた表にしてみよう。やはり日本語の応答は肯定（はい）、否定（いい

ドイツ語				
		答		
問		媒介	応答	応答文
肯定	肯定	肯定	肯定	肯定
	否定	否定	否定	否定
問		応答	応答文	
日本語				

え) とともにドイツ語における答の媒介に相当し、また日本語における応答文は肯定、否定ともドイツ語における応答に当る<sup>8)</sup>。先に、ドイツ語の場合、否定

の問に対する肯定の応答の副詞として、その肯定が内容的に二重否定という強い性格を持ち、また **Ja** より **Doch** の方が同じ肯定でも強力であるという二つの点から、**Doch** が **Ja** に代り好んで用いられることを説明したが、今度はその **Doch** が、肯定の問に対する否定の応答の副詞として、**Nein** に代って使用されるのである。それは、この場合の否定の応答が内容的に否定に媒介され、問における肯定の否定すなわち否定という、同じ否定であっても「否定の肯定」という内容の否定よりも強い性格を持ち、また **Doch** の方が同じ否定でも **Nein** より強力であることに由るのであろう<sup>9)</sup>。

**Kennen Sie den jungen Herrn nicht?**

あの若い男の方をご存じありませんか。

Ja (または Doch), **ich kenne ihn.**

いいえ, 存じております。

**Kennen Sie den jungen Herrn?**

あの若い男の方をご存じですか。

Nein (または Doch), **ich kenne ihn nicht.**<sup>10)</sup>

いいえ, 存じません。

以上のように、肯定の問に対するドイツ語と日本語の応答—Ja と はい, Nein と いいえ—の一致は、あくまでも外見的なものであり、そこには、否定の問に対する両者の応答の相違に認められたと同一の相違が存在する。しかも、ドイツ語と日本語において、否定の問に対する応答の場合にも、また肯定の問に対する応答の場合にも等しく働いているのは、応答を中心とする問から答への、あるいは問に対する答の、単純明快な肯定・否定の論理である。そしてこの論理は問→答（媒介→応答→応答文）という形式において、方向を持つ力として働く。これは、問が決定疑問である場合という条件をつけて、問答の論理と呼ばれようが、問と答のなかでも答の側の応答が中心となるから、一般的には「応答の論理」と名付けられるであろう。

○ 応答の論理は、ドイツ語においてもまた日本語においても、前述のように問の肯・否に係わりなく働くけれども、ドイツ語の場合と日本語の場合とでは、上述のように相違を示す。ドイツ語におけるその機能の形式が問→答（媒介→応答→応答文）であって、媒介が応答に先行するに反し、日本語においてその形式は問→答（媒介＝応答→応答文）であり、応答自体が媒介を兼ねている。ここにおける媒介は、問→答という事柄の性質上、問と応答（ないし答）を媒介するという固定的なものではなく、問を応答（ないし答）へ媒介するという流動的なものであり、しかも既に述べたように、それは答の一部としてその先端にあって問を答の中へ受け入れ、そしてこれを受けとめることにより、問に対する答の決定、言い換えれば問に対する態度決定を準備し、その決定を応答に委ねる働きをする。答の決定とは、問に対して答を返すこと（返答）である。このような媒介は実際にはいろいろな在り方ないし現われ方をするのではなかろうか。多くの場合は瞬間的・潜在的であろうが、ある場合には暫時沈黙考とか、苦慮呻吟ということもあるであろう。

ドイツ語の場合、媒介は応答に先行し、両者は内容的に分化していて、その答としての全体的な機能は分析的である。これに対して日本語の場合は、媒介と応答とは、たとえ時間的に分化しているように思われても、内容的に末分の状態にあり、その答としての全体的な機能は総合的である。同じ応答〔詞〕でありながら、一応ドイツ語のそれ—Ja と Nein が副詞であり、日本語のそれ—はいといいえが感動詞であるのも、このような点にその理由があると考えられる。ドイツ語の応答は、問に対する返答の準備段階である媒介を通して、既に応答文と同一の、問に対する返答という基盤上にある故、応答と応答文は肯定・否定において一致する。応答文は応答のいわば直線的な展開である。従って、おそらくこのことから、応答の副詞がいわゆる陳述の副詞であって、それが肯定ならば肯定の陳述を、そして否定ならば否定の陳述を要求するといわれるのであろう<sup>11)</sup>。ところが、日本語の応答は、それ自体問に対する返答の準備段階である媒介に他ならない。そして外見上はドイツ語の応答と同じ、問に対



する返答ではあっても、実質的には返答以前の準備段階にすぎない。従って、媒介である応答と問に対する返答である応答文との間には、前述したように一種の隙間ないし飛躍が介在し、それが否定の問に対しては、肯定・否定における応答と応答文との不一致を惹き起す根本的条件となっている。言い換えれば否定の問に依って、このような答の内部構造あるいは答の内における隙間—応答と応答文との肯定・否定における不一致—が露呈する。ここでは、応答文は応答のいわば曲線的な展開である。

これまでの考察において既に明らかなように、ドイツ語の応答は問によりもむしろ応答文に直接関係し、日本語のそれは逆に応答文よりもむしろ問に直接関係している<sup>12)</sup>。これを裏からいえば、ドイツ語の応答は媒介を通して間接的に問と繋がり、日本語のそれは隙間を介して間接的に応答文と関係を持つ。同じ応答であっても、ドイツ語の場合は問に対し一定の間をおいて接し、応答文と同様の、しかし問に対する未展開な主体的な態度決定の表明であり、日本語の場合は問に直接し、問に対する主体的な態度決定以前の準備状態の表明であって、問に対して取り敢えず応じ答えるという性格を持つ。ドイツ語の応答は主体的に問に相對（あいたい）し、日本語のそれは非主体的ないし前主体的に問に—誇張となるが—相即（あいそく）している。この意味において、応答の論理は、ドイツ語の場合は「対応の論理」、日本語の場合は「即応の論理」として特色付けられよう<sup>13)</sup>。このような特色から、ドイツ語の応答は問の内容・事柄（事実）に対して用いられ、日本語のそれは問の形式・言葉遣い（表現）に対して使われるといわれ<sup>14)</sup>、また以上の考察全体から、前者が合理的な「論理の文法」の、そして後者が感情的な「心理の文法」のそれぞれ一現象であるという意味のことがいわれるのもあろう<sup>15)</sup>。

なお、この応答の論理が働くのは問（疑問文）に対する場合だけではなく、普通の主張文—あるいはまた命令文や感嘆文—に対する場合もあることを念の為付言し、次にその一例をあげておく。

„Ich beginne heute abend wieder mit dem Unterricht.“

Kein Grund, länger auszusetzen.“

„Nein.“

「ぼくは今晚からまた例の教授を始めるよ。これ以上  
中止しておく理由はないから。」

「うん。」

この小論は、以上述べて来たように、ドイツ語と日本語の応答において具体的に働いている、単純明快な肯定・否定の論理を手がかりおよび方法として、いわば応答の論理によってその論理自体を明らかにしながら、ドイツ語の応答と日本語の応答との異同を考察し、解釈しようとする試みであった。甚だしい見当違いを犯していなければ、幸いである<sup>16)</sup>。

(注)

- 1) この問題に関係する否定の応答—うけことば—を持っている言語としては、ドイツ語以外に、英語、フランス語は勿論、ロシア語、北欧諸語、スペイン語、ポルトガル語、ハンガリア語およびフィンランド語があるといわれているが(泉井久之助著「言語学論攻」昭和19年、敵文館、391頁)、イタリア語も当然含まれるのではないか。
- 2) 感動詞、副詞という分類は必ずしも固定的ではなく、波多野鹿野助著「対照国語学」(昭和28年、英徳社)124頁—125頁によれば、アメリカの言語学者 Bloomfield などは、Yes, No, を感動詞の中に入れていているということである。これに関連して、国文法では副詞は詞に、また感動詞は辞に属する故、品詞でないにも拘らず「応答詞」と一概にいうことは不適當であるから、この小論では一応、「応答(詞)」として表わしておいた。殆どの場合、実際には「応答」として使用した。
- 3) 答は普通このように応答と応答文から成り立つが、応答に集約されて応答文を欠く答、あるいは逆に応答文に集約されて応答を欠く答もあり得ることは事実の示す通り。
- 4) 泉井久之助著「言語学論攻」413頁—414頁。

- 5) 前掲「対照国語学」124頁。  
 6) 榎垣実著「バラとさくら 日英比較語学入門」昭和37年,大修館書店,82頁—85頁。  
 7) 「ところで欧羅巴の言語では No! は必ずしも常に denial を示すものとは限らない。肯定的の問に対しては否定になるけれども, 否定の問に対しては No は却って否定の全体的肯定である。」前掲「言語学論攻」393頁。この意味では日本語のはいと同じになるが, 日本語の場合は, 問における否定の全体的肯定そのままの肯定であるに対し, ドイツ語(ないし英語)の場合は, 問における否定の全体的肯定の結果としての否定である。なお, 「岩波 独和辞典」の nein の項には, このような用法のneinについて, 「否定の問に対しては否定の否定, 即ち肯定となる」との説明がある。  
 8) この表と先の表とで表わしたことを乗法の式で表現すれば, 次のようになる。

① 問：否定, 応答文：肯定の場合

問 媒介 応答 応答文 ……ドイツ語

否定 × 否定 = 肯定 (=肯定)

問 応答 応答文 ……日本語

② 問：否定, 応答文：否定の場合

問 媒介 応答 応答文 ……ドイツ語

否定 × 肯定 = 否定 (=否定)

問 応答 応答文 ……日本語

③ 問：肯定, 応答文：肯定の場合

問 媒介 応答 応答文 ……ドイツ語

肯定 × 肯定 = 肯定 (=肯定)

問 応答 応答文 ……日本語

④ 問：肯定, 応答文：否定の場合

問 媒介 応答 応答文 ……ドイツ語

肯定 × 否定 = 否定 (=否定)

問 応答 応答文 ……日本語

媒介には、問を答の中へ受け入れ・受けとめる面と、それを応答へ媒介する面との二面があると考えられる。この意味において媒介の肯定、否定をそれぞれ肯定=肯定×肯定、否定=肯定×否定とし、これを上の①、②、③および④における乗法式の媒介に当る肯定、否定に代入して、解いて行けば、媒介の機能ないし過程が図式的に明らかにはなるけれども、結果は勿論上の乗法式と同じであり、この乗法式はその簡約化ともいえる。

- 9) Doch は、先行する発言内容に対して相反ないし制限する機能を持つ故、否定の間にも肯定の間にも Ja または Nein より強い力を持つものとして、Ja および Nein に代り用いられる。真鍋良一著「改訂新ドイツ語会話」(昭和38年、三修社)16頁において、これは「相手の言ったことを訂正して答える doch」と呼ばれているが、それには関口存男氏のいわれた「やはり」、「やっぱり」という意味一元の肯定または否定に帰る(肯定→否定→肯定または否定→肯定→否定)一のあること(関口存男著「独逸語学講話」昭和18年、日光書院—後に三修社—201頁—206頁)が前提とされているようである。なお、フランス語には、ドイツ語の肯定的な Doch に相当するものとして、Si があることはいうまでもない。
- 10) 応答文中の動詞を省略してというより、むしろ答を応答の方へ集約して、肯定の場合は単に Doch、否定の場合はただ Doch nicht ともいえる。Hermann Paul, *Deutsches Wörterbuch*, doch の項参照。
- 11) (注), 5) 参照。
- 12) 同上。
- 13) このような速断とか図式的な類型化には大きな危険が伴うけれども、序に敢えてその危険を冒せば、対応の論理はまた、間接ないし媒介の論理、あるいは対立の論理ともいえようし、即応の論理もまたそれに対して、直接ないし無媒介の論理、あるいは融合の論理と言い換えられえよう。そしてこれを一般化すれば、いわゆる対話(Dialog)において働くのは前者であり、これが基盤となって対話の論理または方法としての弁証法(Dialektik)が成立しているといえるのではなからうか。
- 14) (注), 4) 参照。
- 15) (注), 6) 参照。
- 16) 前掲「言語学論攻」437頁には、「ポナペ島の生活と言語」の「追記二」として、

この小論でいう応答の副詞の語法が、ポナペ島のみならず、トカラ列島や奄美群島にもみられ、更に類似の語法が九州そして本州の田舎でも行なわれているとの河村只雄氏の指摘と説明が紹介されている。ポナペ島の場合は別としても、応答の感動詞ないし即応の論理が支配的である〔と思われる〕日本語圏においてこのように異質的な応答の副詞が使用され、対応の論理が働いている地域があるとすれば、それは日本文化と外来文化との激しい接点ないし接線における、外来文化の日本文化圏（日本語圏）への滲透の言語的な—しかし勿論単に言語面だけに限定され得ない—一つの現象とも推測されよう。しかし、既に行なわれているかもしれないが、上のような事実とその由来の実証的な解明がなされるに越したことはない。